ストライク・ザ・ブラッド

STRIKE THE BLOOD

APPEND1

続・聖者の右腕／人形師の遺産

－第一章－

ストライク・ザ・ブラッド

STRIKE THE BLOOD

APPEND1

続・聖者の右腕／人形師の遺産

―第一章―

著／三雲岳斗

イラスト／マニャ子

何層にもわかれた無機質な街並みを、眩い人工の照明が照らしている。

人工島北地区（アイランド・ノース）――紘神（ひとがみ）島の中でも、もっとも〝魔族特区〟らしさを感じさせる未来的な風景。企業や大学の実験施設が建ち並ぶ、広大な研究所街である。

そんな無機質な街の片隅に、その建物は放置されていた。

欧州ロタリンギアに本社を置く大手医薬品会社、スヘルデ製薬の研究所跡地だ。

ほぼ直方体に近いビルの内部は、教会の聖堂を連想させる背の高い広い部屋になっていた。

ステンドグラスの代わりに壁際に並んでいるのは、円筒形の水槽である。

それぞれ直径は一メートルほど。高さは二メートル弱といったところだろう。それらが左右合計で二十基ほど、整然と配置されている。

それらは人工生命体（ホムンクルス）を創り出すための、調整槽と呼ばれる容器だった。ここはかつて、人工生命体（ホムンクルス）技術を応用した、新薬の実験施設だったのだ。

しかし円高と売り上げ低迷に伴う経営悪化によって、スヘルデ製薬は紘神島から撤退。この研究所も、その際に閉鎖されたはずだった。

にもかかわらず、調整槽の中には琥珀色の液体が満たされ、ポンプと濾過フィルタが静かな駆動音を響かせている。そして藍色の髪をした人工生命体（ホムンクルス）の少女が、ゆらゆらと溶液中を漂いながら眠り続けていた。

少女の肌には、電子回路のような複雑な模様が、青白く輝きながら浮き上がっている。

生体組織に転写（プリント）された、魔法術式の術紋である。

その術紋を満足げに見上げているのは、擦り切れたジーンズを穿いた長身の男だ。

髪をぼさぼさに長く伸ばしており、手には金属製のウイスキーボトル。素肌の上に直に白衣を羽織った姿は、医師や科学者には見えない。時代遅れのロック歌手か、反社会的な芸術家という雰囲気だった。

その白衣の男が、不意に振り返ってニヤリと笑う。

ちょうど彼の背後から、重々しい足音が聞こえてきたところだ。

「よぉ、あんたか……今日のお祈りは終わったかい、殲教師殿（せんきょうしどの）？」

近づいてくる大柄な人影に向かって、白衣の男が皮肉っぽく呼びかける。

調整槽の陰から現れたのは、聖職者のような法衣をまとった男性だった。

金髪を軍人のように短く刈り込んだ、長身の外国人である。

左目には、眼帯のような金属製の片眼鏡（モノクル）を嵌めている。

ただでさえがっしりとした体格である上に、彼が身に着けた法衣の下には、金属製の鎧が見えていた。軍用の装甲強化服である。

西欧教会の司教でありながら、魔族を駆逐する高位祓魔師（ふつましし）の技能をも身につけた特殊な聖職者――ロタリンギアの殲教師。ルードルフ・オイスタッハというのが彼の名前だ。

「アスタルテの調整は進んでますか、人形師」

オイスタッハが、穏やかな口調で男に呼びかけた。藍色の髪の人工生命体（ホムンクルス）――アスタルテの調整を男に依頼したのは、この殲教師だ。

「術紋の書き換えは済んでるよぉ。なあ、スワニルダ」

人形師と呼ばれた男が、誰にともなく呼びかける――と、彼の背後の薄闇の中で、なにかが起き上がる気配があった。銀色のドレスを身に着けた、ほっそりと美しい影である。

「肯定。上書きした術紋が肉体に完全に浸透するまで、残り四時間十五分です」

抑揚のない無機質な声で、スワニルダと呼ばれた影が答えた。

美しい純白の髪を持つ、十代半ばの少女である。

完全に左右対称の人工的な美貌は、アスタルテによく似ている。

しかし彼女の造形と動作の滑らかさは、すでに人工生命体（ホムンクルス）としての範疇を逸脱していた。生物ではなく、絵画や彫刻と同じ、芸術作品の美しさだ。

しかしオイスタッハは、そんなスワニルダの美貌には一瞥もくれずに質問を続ける。

「依頼した術式は、完成したのですね」

「当然さ。俺を誰だと思ってる？」

人形師は不敵な表情を浮かべて、ウイスキーのボトルを乱暴にあおった。強いアルコールの臭いが周囲に漂い出す。

「とはいえ、あんたが持ってきた七式降魔突撃機槍（シュネーヴァルツァー）の戦闘データは役に立ったよ。よくあんなものが手に入ったなぁ？　獅子王機関の秘奥兵器だろ？　神様のお導きってやつかい？」

「背教者である貴方が、神の意思を語りますか？」

オイスタッハが不機嫌そうに眉を寄せた。

そんな殲教師の生真面目な反応に、人形師がくっくっと喉を鳴らす。

「そう怖い顔しなさんな。ほら、シミュレーションの結果だ。気になるだろ」

人形師が素っ気なく右手を挙げた。

スワニルダと呼ばれた人形が、滑らかな動きで制御卓（コンソール）を操作し、調整槽の端末にデータを表示する。アスタルテの体内に植えつけた人工眷獣（けんじゅう）の、最新の能力値を示したものである。

「やはり魔力の完全無効化は無理ですか」

オイスタッハが淡々と呟いた。残念そうな言葉のわりに、本気で落胆した気配はない。この結果を最初から予想していたのだろう。

「人工眷獣の膨大な魔力で無理やり補っちゃいるが、素体になってるのがホムンクルスだ。獅子王機関の剣巫（けんなぎ）のようにはいかないさ」

酒臭い息を吐きながら、人形師は肩をすくめてみせる。

「だがまあ、完全無効化は無理でも、魔力を反射するだけならなんとかなるだろ。あとは力で押し切ることだな」

「十分です。キーストーンゲートの結界を破れるなら、それでいい」

オイスタッハが強固な決意を滲ませた口調で呟いた。

キーストーンゲートとは、絃神島の中央に位置する建物の名前だ。絃神島を構成する四基の人工島の連結部として、島全体を支える、要石の役目を与えられた巨大複合建造物である。そのキーストーンゲート最下層こそがオイスタッハの目的地なのだ。

そしてキーストーンゲートに侵入するために、オイスタッハが用意した〝道具〟がアスタルテだった。強力な結界で護られた隔壁を突破するためには、アスタルテに植えつけられた人工眷獣と、神格振動波駆動術式が不可欠だったのだ。

「ただし、今回の再調整で、アスタルテの寿命は相当縮んだぜ」

調整槽に浮かぶ人工生命体の少女を見上げて、人形師が言った。心なしか彼の声音には、依頼主であるオイスタッハを非難するような響きがある。

「せっかくこいつには、普通の人間の何十倍もの寿命を設定してやったのにな。このまま眷獣を使い続ければ、保ってあと二、三週間ってとこだな」

「問題ありません。それだけあれば、この島を完全に沈めてもまだ余裕がある」

断言するオイスタッハの口調は冷ややかだった。

聖職者である彼にとって、神の摂理に逆らって生み出された人工生命体は、忌むべき魔族の同類だ。使い捨てにしたところで、良心の呵責を覚えるはずもない。

無言で首を振りながら、人形師はオイスタッハに背中を向ける。アスタルテの調整はすでに終わって、殲教師からの依頼は果たした。彼の仕事はすでに終わりだ。

「やれやれ。ものの価値のわからない男だな」

美しい人形の少女を連れて、白衣の男は研究所の外へと向かう。鬱陶しげに長髪をかき上げる彼の口元には、殲教師への侮蔑が浮かんでいた。

「人形ってのは、永遠に生き続けるから価値があるんだぜ。所有者である人間が滅びても、な。そうだろ、スワニルダ」

男は、愛おしげに純白の髪の人形に呼びかける。

人形の少女は、無表情なまま静かにうなずいた。

「肯定――」

第一章　先輩、お大事に　―Vampire's Flu―

「あああああっ!?　まだ寝てる！」

眠っていた暁古城を叩き起こしたのは、妹の甲高い叫び声だった。制服に着替えた暁凪沙が古城の毛布を剥ぎ取って、部屋中のカーテンを次々に開け放つ。ありふれた暁家の朝の風景だ。

夜行性の吸血鬼にとって、強烈な朝陽を浴びながらの早起きは地獄の苦しみである。それは、世界最強の吸血鬼などと呼ばれる第四真祖にとっても例外ではない。

しかしそんな兄の事情を知らない凪沙は、容赦なく古城の背中を揺らし、

「起きなよ、古城君！　朝だよ！　また遅刻するよ！　さっきも一度起こしてあげたでしょ！」

「あんまり耳元で怒鳴らないでくれ。頭がガンガンする」

うつ伏せに眠っていた古城が、弱々しくうめきながら顔を上げた。寝起きの悪さには定評のある古城だが、今日はいつにも増して声が頼りない。

凪沙は少し呆れたように、腰に手を当てて古城を見下ろし、

「部活のミーティングがあるから、凪沙はもう行くよ。朝ご飯は用意してあるから、ちゃんと食べてね。サラダのトマトも残しちゃダメだよ！」

「おー……わかったわかった」

古城は妹に気怠く手を振った。慌ただしく出かけていく凪沙の足音を聞きながら、のろのろとベッドの上に起き上がる。その瞬間、かすかな寒気を覚えて、古城はくしゃみを連発した。重力で落下しそうになった鼻水を、慌てて引っ張り出したティッシュで拭う。

「うー……なんだこれ。オイスタッハのオッサンに殺されたときの後遺症か……？」

原因不明の体調不良に、古城は戸惑いながら首を振った。頭の芯がズキズキと疼痛を訴えていた。全身が重く、関節が軋む。呼吸のたびに喉が痛んだ。単なる寝不足というわけではなさそうだ。

心当たりとして真っ先に思い出したのは、ルードルフ・オイスタッハのことだった。

あのロタリンギアの殲教師に巨大な戦斧でぶった切られて、古城は危うく死にかけた。正確に言えば、一度は完全に命を落としたのだ。真祖の呪いによってすぐに復活したとはいえ、目には見えないダメージが、身体の中に残っていてもおかしくはない。

ダイニングテーブルの上には、凪沙が用意した朝食が置かれていた。

今朝のメインはカツサンドだ。昨日の夕飯で残ったヒレカツを流用したものだが、細かく刻んだ千切りキャベツに、八丁味噌を混ぜこんだ特製ソースで味付けした本格派である。見た目は実に美味そうだが、体調不良のせいで食欲が湧かな

い。やはり内臓が弱っているらしい。
「悪いな、凪沙……あとで喰うから」
古城は独り言で妹に詫びつつ、カツサンドにラップをかけて冷蔵庫に入れる。
そうこうしている間にも、登校しなければならない時間が迫っていた。
ひどい倦怠感を引きずりながらも制服に着替え、古城は玄関のドアを開ける。と、
「――おはようございます、先輩」
まるで古城を待ち構えるようにマンションの廊下に立っていたのは、凪沙と同じ、彩海学園中等部の制服を着た女子生徒だった。
黒いギターケースを背負った、綺麗な顔立ちの少女である。体つきは華奢だが、儚げな雰囲気は感じられない。むしろ美しい刃物のような、しなやかで強靭な印象が強い。
獅子王機関の剣巫、姫柊雪菜(ひめらぎゆきな)――
古城を監視するために送りこまれてきた、政府特務機関の見習い攻魔師(こうましし)。あるいは国家公認ストーカーとでも呼ぶべき中学生だ。
「あのさ、姫柊……こんなふうに毎朝、うちの前で待っててくれなくてもいいんだが」
じっと見上げてくる雪菜を眺めて、古城が溜息混じりに忠告した。
いくらマンションの廊下とはいえ、朝の通勤時間帯ともなればそれなりに人目がある。ただでさえ雪菜の容姿は目立つのだ。古城を見張っている彼女の姿を、マンションのほかの住人に見られたら、妙な噂が立つのは間違いないだろう。
「いえ。先輩の監視がわたしの任務ですから」
しかし雪菜は、きっぱりとそう言って首を振る。どうやら監視の手を緩める気はないらしい。それどころか雪菜は古城を見つめたまま、すぐ目の前にまで近づいてきて、
「それよりも先輩、なにかあったんですか？」
「ん？　なにかって？」
「いえ。顔色があまり優れないようですけど……声も少し嗄れてるみたいですし」
「毎朝こんな感じじゃなかったか？　この島の直射日光は吸血鬼にはつらいぜ、まったく……」
無駄によく晴れた空を眺めて、古城は忌々しげに呟いた。
紘神島は太平洋のド真ん中、東京の南方海上三百三十キロ付近に浮かぶ人工島だ。南国特有の強烈な陽射しは、それだけで古城の体力をじりじりと奪っていく。
「吸血鬼……」
雪菜はハッとしたように眉を寄せ、観察するような視線を古城に向けてきた。
古城は、居心地の悪い気分を覚えつつ、「それでも今日は涼しいから助かってるけどな。ていうか、ちょっと肌寒いか？」
「肌寒い？」
古城の呟きを聞きつけて、雪菜がますます不審げな表情になる。
「あの、先輩……ちょっと屈んでもらえますか、すみません」

「屈むって……こうか？」
古城は言われるままに膝を曲げた。小柄な雪菜と、ちょうど目線の高さが同じくらいになる。
雪菜はそれを確認してうなずくと、
「はい。ありがとうございます」
そう言って、いきなり正面から古城に顔を寄せてきた。古城の前髪を無造作にかき上げ、同じく全開にした自分のおでこを、古城の額にくっつけてくる。
古城はその間、なにも考えられずに硬直していた。
互いの唇から唇までの距離は十センチ足らず。迂闊に動けば、そのまま触れてしまいそうだ。
「ひ、姫柊？」
「そのまま動かないでください」
「い、いや……そんなこと言われても……」
雪菜の端整な顔が目の前にあるというだけでも落ち着かないのに、その雪菜と身体の一部が接触しているのだ。おまけに彼女の髪からは、得も言われぬいい匂いが漂ってきて、この状況で動くなと言われても無理がありすぎる。
しかし動揺する古城とは裏腹に、雪菜は表情を険しくして、
「やっぱり……！」
「え？」
「先輩、熱がありますね」
「熱って……俺が？」
古城は驚いて目を瞬いた。
吸血鬼の平熱というのがどの程度のものかは知らないが、言われてみれば、普段よりも少し熱っぽいのではないかと自覚する。古城の耳たぶをつまむ雪菜の指先が、やけに冷たく感じられた。
「もしかして、風邪を引いていませんか？　なにか自覚症状は？」
「いや、べつに。ちょっと全身が怠くて、身体の節々が痛むくらいだが。あとはたまに、咳とくしゃみと鼻水が……」
「完全に風邪の症状じゃないですか」
雪菜が呆れたように溜息をついた。古城は気まずい気分で目を逸らす。
「だな……言われてみれば、たしかに」
発熱、悪寒、頭痛、関節痛、筋肉痛に鼻水、くしゃみ。ぐうの音も出ないほどの典型的な風邪である。
「だけど、それはおかしくないか。この俺が風邪を引くなんてことがあり得るのか？」
「あの、先輩……馬鹿は風邪を引かないという俗説は、実は迷信なんですよ」
雪菜が、どこか哀れむような眼差しで古城を見つめた。
古城はたまらずに咳きこんで、
「それくらい知ってる！　てか、なんで俺が馬鹿だから風邪を引かないなんて話になった!?」
「あ……すみません……その、てっきり……」
てっきりなんだ、と古城は荒々しく息を吐き、
「そうじゃなくて、なんで不老不死の吸血鬼が風邪を引くのかって話だよ！」

「あ、ああ……そういうことですか」
古城の質問の意図をようやく理解して、雪菜は少し焦ったように説明を続けた。
「あまり知られていませんけど、魔族特有の感染症というのも存在するんです。特に絃神島には世界各地から多くの魔族が集まってますし、人口密度も高いですから、知らないうちにどこかで保菌者（キャリア）と接触してしまったのではないかと」
「魔族だけが発症する病気ってことか……」
「はい。先輩の症状から判断して、おそらく吸血鬼風邪と呼ばれる病気だと思います」
「そのまんまの病名だな……まあ、いいけど」
古城が気の抜けたような声で言う。
「吸血鬼なら、誰でも一度はかかる病気だと聞いたことがあります。子どものころに経験すると免疫が出来て、それ以降は滅多に発症しないそうですけど」
「そうか……俺の場合は吸血鬼になったばかりだから……」
「そうですね。免疫抗体がなかったせいで、発病した可能性が高いです」
雪菜が冷静に指摘した。
普通の人間だった古城が奇怪な成り行きで吸血鬼の力を手に入れたのは、ほんの数カ月前のことだった。魔族特有の病気の抗体を、古城が持っていないのは当然だ。
「じゃあ、この病気って、普通の人間には感染しないのか？」
「ええ、おそらく。吸血鬼特有の症状ですし」
「だったら学校に行っても問題なさそうだな」
「……え!?」
古城の何気ない発言を聞き咎めて、雪菜が大きく目を見開いた。
「だ、駄目です、先輩！　風邪のときは安静にしてないと！」
「そう言われてもな……しょせん子どものかかる病気だろ？　出席日数や単位も心配だし、この程度の熱ならなんとか乗り切れるんじゃないかって」
「いえ、吸血鬼風邪は大人になってから罹患（りかん）すると、重症化しやすいといわれてるんです。高熱が何日も続いたり、情緒不安定になって奇行に走ったり……あとは、その、生殖機能に後遺症が残ってしまうこともあるとか」
緊張感に欠けた態度の古城を、雪菜が必死に制止する。
「せ、生殖機能……!?」
古城もさすがに動揺した。生殖機能にダメージということは、つまり男性として子孫を残せなくなってしまう、という意味だろうか。
「はい。ですから、その、大人しく治療に専念したほうが良いかと」
「そ、そうだな。風邪は引き始めが肝心だよな」
古城は力強く同意した。実際問題、風邪を引いたと自覚したせいか、急激に全身の気怠さが増している。雪菜に言われるまでもなく、この状況で登校するのは厳しそうだ。
「暖かくして、休んでいてください。わたしがお手伝いしますから」
ふらつきながら自宅に戻ろうとする古城を、雪菜がそっと

背中から支えてくる。
「手伝う……って、姫柊？　学校は？」
古城が戸惑いながら訊き返した。発病中の古城はともかく、体調に問題ない雪菜までもが、授業を欠席する理由はないはずだが、
「今日は休みます。凪沙ちゃんの代わりに、先輩の看病をしないといけませんし」
「いやでも、姫柊にそこまでしてもらう理由はないっていうか、べつに手伝ってもらうようなこともないしな――」
古城が困惑したような口調で言う。
その瞬間、雪菜がむっと唇を尖らせた。自分がいても役に立たないと思われてる、というふうに、古城の言葉を受け取ったらしい。
「いいえ、力ずくでも看病します。わたしは先輩の監視役ですから！」
なぜかムキになったような口調で、雪菜が強硬に主張する。
本気で銀色の槍を取り出そうとする雪菜を見て、古城はそれ以上の抵抗を諦めた。

2

リビングのソファに毛布まみれで横たわり、古城は一人でぼんやりとテレビを眺めている。ちょうど朝の料理番組をやっているところだ。
そんな古城のすぐ傍で、雪菜は辞書のように分厚い本をめくっていた。
彼女の隣に置かれているのは獅子王機関から送られてきたとおぼしき重厚なアルミケースと、近所のスーパーの買い物袋だった。
「あのさ、姫柊」
「はい。なんでしょうか？」
雪菜は本に視線を落としたまま、心配そうな古城の呼びかけに答えてくる。
「さっきから気になってたんだが、なんだ、その本？」
「医学書です。吸血鬼風邪の治療法を調べてます」
そう言って雪菜は、開いていたページを古城に向けた。そこには難解な化学式やグラフが、びっしりと印刷されていた。たかが風邪の対策を調べるのに、なぜそこまで本格的な学術論文が必要なのかと、古城は逆に恐くなる。
「そうか……じゃあ、姫柊が買ってきたその荷物って……」
「材料です。お薬の」
「薬？」
「はい。〝魔族特区〟の病院だったら、吸血鬼風邪のお薬くらい、すぐに処方してくれると思うんですけど、先輩は未登録魔族ですから、受診すると面倒なことになりますよね」
「ああ……魔族登録証がないから、俺は医者に診てもらえないのか……」
古城は顔をしかめながら自分の手首を眺めた。〝魔族特区〟では、登録魔族の医療費は無料（タダ）。一般人への販売が禁止されている魔族用の医薬品も手に入る。だがそれは、市民として

登録されているまともな魔族だけの話だ。
ただでさえ古城は、普通の人間が真祖化したという極めて特殊な吸血鬼なのだ。うっかり病院に行って正体がバレたらどんな騒ぎになるか、想像するだけでも恐ろしい。
「ですから、わたしが調合します」
落ちこむ古城に微笑みかけながら、雪菜が胸を張って宣言する。
「姫柊が……調合？」
「古典的な製法ですけど、薬効成分としては市販の医薬品と同じですから。材料が手に入ってよかったです」
そう言って雪菜が取り出したのは薬研（やげん）だった。時代劇などでよく見かける、薬草などをすり下ろすための器具である。
古色蒼然としたその姿に、古城は胡乱げな視線を向けて、
「へえ……材料って、たとえばどんなのだ？」
「そうですね、まずはネギとか」
雪菜が買い集めてきた材料の中には、たしかに新鮮な長ネギが見えている。
「ネギ？」
「はい。焼いたネギを喉に巻いておくと、ネギに含まれる硫化アリルという成分が粘膜を刺激して、喉の痛みや鼻詰まりを和らげてくれるんです」
ふふん、と息を洩らしながら、得意げな口調で説明する雪菜。古城は脱力してソファから滑り落ち、
「おばあちゃんの知恵袋かっ！　それ、吸血鬼と全然関係ないよな!?」
「あ、あとはニンニクも！　ニンニクの強い殺菌作用と強壮効果が、風邪の回復に効果的だと――」
「たしかに効果はあるんだろうけど、吸血鬼にニンニク喰わせるってのはどうなんだ……？」
古城が半眼で雪菜に訊いた。う、と雪菜は言葉に詰まる。
「そ、そういうことでしたらスッポンの生き血とか……！」
「いくら吸血鬼だからって、血が吸えればなんでもいいってわけじゃねーから！」
雪菜が取り出した小瓶を睨んで、古城は声を荒らげた。ただでさえ風邪で食欲がないときに、スッポンはハードルが高すぎる。
用意したアイテムにことごとくダメ出しを喰らってしまった雪菜は、少し拗ねたように唇を引き結んで、
「そうですか……ではやはり、これを使うしかないですね」
雪菜は緊張した面持ちで、厳重にロックされたアルミケースの蓋に手をかけた。
「それは？」
「呪術に使う触媒です。本来は、暗殺用の毒物を作るための材料なんですけど」
「毒!?」
古城の声が甲高く裏返る。
雪菜は、獅子王機関に派遣された第四真祖の監視役。人類にとって危険だと判断した場合、古城を抹殺する権限を与えられているのだという。つまりその触媒とやらは、古城を暗殺するために用意されたものということになる。

「前に寮で同室だったルームメイトが、わざわざ送ってきてくれたんです。もしものときには、これを使うようにと」
「元ルームメイトに毒物を送ってくるか普通!?　どんな性格してんだ、そいつは!?」
「あの、大丈夫です。毒は薬なり、という中世の有名な錬金術師の言葉もありますし。分量を間違えさえしなければ」
「全然安心できないんだが！　むしろ余計に不安になったわ！」
古城がふて腐れように唇を歪めた。中世の錬金術師が、水銀などの薬物中毒によって数多く命を落としたのは有名な話である。
「な、なあ、姫柊。そういえば俺は、食欲がなくて、まだ朝飯を喰ってないんだけど」
古城はふと思いついて、無理やり話を変えてみた。雪菜が驚いたように目を瞬く。
「え？　そうなんですか？」
「ああ。だから、薬は飲まないほうがいいかなって。ほら、強い薬はなるべく空腹時を避けて服用しないとな」
「そうですね。たしかに先輩の意見ももっともです」
雪菜は真面目な表情で考えこむ。基本的に素直な性格なのだ。
そうだろそうだろ、と古城は大袈裟にうなずいてみせる。このままどうにか時間を稼いで、薬のことをうやむやにしてしまおう、という計画である。
しかし雪菜はおもむろに立ち上がって、キッチンのほうへと歩き出すと、
「では、お薬を調合する前に、食事を用意しますね。凪沙ちゃんのエプロン、お借りします」
「え？　用意するって、姫柊が？」
予想外な雪菜の反応に、古城は戸惑いを隠せない。その間にも雪菜はエプロンを身に着け、そして自分の通学鞄から唐突にナイフを取り出した。
「ええ、もちろん。おかゆだったら食べられますか？」
「ちょっと待て……そのごっついコンバットナイフはなんだ？」
雪菜が握る無骨な軍用ナイフを見て、古城が声を震わせる。
しかし雪菜は、きょとんと不思議そうに首を傾げて、
「ですから、おかゆの用意を。薬味のネギを切ったり、おダシを取ったり」
「包丁は!?　包丁があるだろ!?」
「はい。でも、やはり使い慣れた刃物のほうが便利ですから。これなら豚の大腿骨でも切断できますし」
「いやいや、おかゆのダシは豚骨でとらないから！　ラーメンのスープじゃないんだから！」
喉の痛みをこらえながら、古城は必死にツッコミを入れた。
「それに使い慣れてるもなにも、そもそも姫柊って料理できるのか……？」
「はい。もちろん」
古城の言葉を挑発と受け取ったのか、雪菜が強気に答えてくる。

「獅子王機関でサバイバル訓練も受けてますから、知識だけなら、ひととおりは。野豚の解体やスッポンの捌き方もいちおう」
「その知識は今は要らないから！」
勘弁してくれ、と天井を仰いで呟く古城。そんな古城の気持ちを知ってか知らずか、雪菜はいそいそと借り物のエプロンを身に着けて、さっそく料理の準備を始めたのだった。

3

古城が目を覚ましたのは、それから数時間後のことだった。
雪菜が作ったおかゆを食べて、彼女が調合した薬を無理やり呑まされたはずなのだが、なぜかその前後の記憶がない。無理に思い出そうとすると、全身に原因不明の震えが走った。世の中には、忘れているほうが幸せということもあるのかもしれない。
「目が覚めましたか？」
気怠く寝返りを打った古城の耳に、気遣うような声が聞こえてくる。ふと見ると心配そうな顔をした雪菜が、すぐ傍で古城のことを見つめていた。
「姫柊……ずっとついててくれたのか？」
「はい。あ……いえ、べつに先輩の寝顔をずっと見ていたというわけでは……」
雪菜が赤面しながら早口で言い訳する。
古城はソファの上に上体を起こして、時間を確認した。時計の針は正午をだいぶ過ぎている。三時間ほど眠っていたらしい。おかげで体力もいくらか回復したようだ。
「熱は少し下がったみたいですね。でも、すごい汗……ちょっと待っててください」
「え……？」
立ち上がった雪菜がバスルームに向かい、お湯を張った洗面器とタオルを持って戻ってくる。
「身体、拭きますね。脱いでください」
「脱げって……ここでか？」
古城がギョッとして訊き返す。雪菜は、当然です、というふうにうなずいて、
「汗で濡れたままだと、風邪が悪化しますよ」
「いや、いい。いいよ。それくらいは一人でやるから！」
そう言って雪菜からタオルを受け取ろうとした瞬間、古城は目眩に襲われてよろめいた。急に立ち上がろうとしたせいで、軽い立ち眩みを起こしたのだ。
雪菜は、それを素早く支えながら、ほら、と古城を優しく咎め、
「まだ無理はしないでください。背中だけでも手伝いますから」
「ああ。悪いな……」
古城がゴホゴホと咳きこみながら言った。任務ですから、と雪菜は澄まし顔で首を振り、古城がシャツを脱ぐのを手伝おうとする。
出し抜けに暁家の玄関チャイムが鳴ったのは、その直後のことだった。
ピンポン、という軽やかな電子音に、二人は驚いて動きを止める。
「こんな時間に、誰だ？　宅配便か？」
気恥ずかしさを誤魔化すように、古城が不機嫌な声でそう言った。
「ちょっと見てきますね」
雪菜は、警戒したように足音を殺して玄関へと歩き出す。
しかし彼女が玄関に辿り着く前に、ドアノブがガチャリと音を立てて回った。開いたドアの隙間から聞こえてきたのは、古城たちもよく知っている声だった。
「お……なんだ。玄関の鍵、開いてるじゃねーか」
「不用心ね。なにやってんのよ、古城ったら」
勝手なことを言いながら、二人組の来客が無断で部屋に上がりこんで来る。なんの前触れもなく訪れたその危機的状況に、古城はゴフッと喉を詰まらせた。
「矢瀬!?　浅葱もか!?　なんであいつらが……!?」
「ど、どうしましょう……先輩!?」
慌ててリビングに戻ってきた雪菜が、青ざめながら訊いてくる。雪菜が握っているのは自分の靴だった。かろうじて浅葱たちに気づかれる前に、玄関から回収してきたらしい。
「と、とりあえず隠れろ、姫柊！」
古城が上擦った声で雪菜に言う。看病のためとはいえ、下級生の女子を自宅に連れこんでいるだけでも問題なのに、今の古城は上半身裸なのだった。このままでは、ろくでもない誤解を受けるのは間違いない。
「は、はい！」
雪菜もそのことは自覚しているのか、古城が寝ているソファと壁の間のわずかな隙間へと、咄嗟に素早く滑りこんだ。
ほとんど同じタイミングで、藍羽浅葱がリビングに入ってくる。ソファに座る古城の姿に気づいて、制服姿の浅葱はその場で足を止め、
「こ、古城!?　なんて恰好してんのよ、あんた!?　風邪引いて休んでたんじゃなかったの!?」
彼女が握っていたコンビニ袋が足元に落ちて、その中身が床に散らばった。
「他人ん家に勝手に入ってきたやつに、なんで俺が怒られてんだよ。汗かいたから着替えようと思ってただけだって」
古城はなるべく冷静を装って言い返す。
浅葱は両手で目元を覆いながらも、ちらちらと半裸の古城を見つめて、
「あ、ああ、そういうことね。それならそうともっと早く言いなさいよ！」
逆ギレ気味に浅葱に命じられて、無茶言うな、と古城は嘆息する。
すると、浅葱のあとから部屋に入ってきた矢瀬が、なぜか嬉しそうに古城に近づき、
「オーケーオーケー、だったら俺が背中を拭いてやるよ。一人じゃなにかと不便だろ」
「うぇ……!?」

矢瀬の目つきに、なにやら不穏な気配を覚えて、古城は表情を引き攣らせる。それを見た矢瀬はますます攻撃的に唇を吊り上げて、
「なんだよ、その嫌そうな顔は。それとも浅葱に任せたほうがよかったか？」
「どっちも要らねーよ。一人でできるから！　もうだいたい拭き終わったところだし！」
「ほぉう……一人で、か」
意味ありげな矢瀬の呟きに、古城の動きが凍りつく。矢瀬はその隙に古城の手から、汗拭き用のタオルを奪い取り、
「って、馬鹿！　どこ触ってんだこら!?」
「まあまあ。遠慮するなって」
「っていうか、学校はどうしたんだよ、おまえら!?　まだ授業は終わってねーだろ！」
「午後イチの授業が自習になったからな。昼休み使って見舞いに来てやったんだ。感謝しろよ」
乱暴に押さえつけた古城の背中を拭きながら、恩着せがましい口調で矢瀬が言った。
古城の恰好にもようやく慣れてきたらしい浅葱が、テーブルの上にコンビニ袋を置いて、
「凪沙ちゃんがいないと困るだろうと思って、ご飯も買ってきてあげたのよ。レトルトのおかゆとかだけど」
「そうか。悪いな、助かる」
古城は素直に感謝の言葉を口にした。病人用の食事が前もって用意されていれば、雪菜も、あえて危険な手料理に再び挑もうとはしないはずだ。
「言っとくけど、金払ったのは俺だからな……って、どうした、浅葱？」
さりげなく自分の貢献をアピールしようとした矢瀬が、訝しげな声で浅葱に呼びかけた。真剣な表情でリビングの中を見回していた浅葱は、ううん、と素っ気なく首を振り、
「てっきり、あの子がいるんじゃないかと思ったんだけど」
「あの子って……ああ、中等部の転校生ちゃんか」
浅葱たちの鋭い指摘に、古城の顔から血の気が引く。ソファの陰に隠れている雪菜が、全身を強張らせたような気配があった。この状況で雪菜が見つかったら、今度こそどうやっても言い訳できそうにない。
「ひ、姫柊がこんなところに隠れてるはずないだろ。ストーカーじゃないんだから」
古城は頼りない口調で説得を試みた。矢瀬は案外あっさりと納得して、
「ああ。そりゃまあ、そうだよな」
「うん……まあね」
浅葱もいちおうは同意する。雪菜が欠席しているという情報は、幸運にも浅葱たちにはまだ伝わっていないらしい。それでも浅葱は、部屋の中の様子を用心深く観察し、その直後、
「お、なんだこの荷物？　長ネギにニンニクにスッポンに……危険物取り扱い注意？」
声を弾ませて騒ぎ出したのは、矢瀬だった。雪菜が放置していたアルミケースに興味を覚えたらしい。その中身が毒物だったことを思い出し、古城の背中に冷や汗が噴き出す。
「ば、馬鹿！　それに迂闊に触るなって！」
「お!?　そう言われると余計に気になってくるな」
「だからっ……！　ていうか、おまえら、帰れよもう！」
なけなしの体力を振り絞って古城が怒鳴る。その間に浅葱は、くんくん、と鼻をひくつかせ、
「気のせい……かしらね」
雪菜の残り香を探し当てたかのように、疑わしげな口調で呟いていた。
古城は首筋にゾッと悪寒を覚えて、祈るような気分で溜息をつく。
「勘弁してくれ……」

4

派手に騒ぐだけ騒いで、浅葱と矢瀬は帰っていった。彼女たちなりに古城のことを心配して見舞いに来たのだろうが、結果として古城の体力をごっそりと奪っていった形である。
二人が完全に立ち去ったのを確認して、雪菜はソファの隙間から這い出した。
緊張で体力をすり減らしていたのは、雪菜も同じだ。気配を完全に殺していたはずなのに、浅葱に嗅ぎ当てられそうになったときには愕然とした。獅子王機関の訓練でも、ここまで追い詰められた記憶はほとんどない。
「……先輩、大丈夫でしたか？」
弱々しい溜息をつきながら、雪菜が古城に呼びかける。
ソファの上でうなだれている古城は、さっきからほとんど身動きをしていない。
「あの、先輩？」
返事がないことを怪訝に思って、雪菜は、古城の顔をのぞきこんだ。そしてハッと息を呑む。どこか虚ろな古城の瞳が、紅く輝いていたからだ。
古城のまとっている雰囲気が、普段の彼とは違っていた。吸血鬼の真祖と呼ぶに相応しい、冷え冷えとした威圧感と威厳を感じる。その強大な気配に雪菜は圧倒されそうになる。
「――俺はいい。それよりも姫柊は大丈夫か？」
古城が悠然と脚を組み直しながら訊いてくる。声が掠れているところを見るに、体調が復活したわけではなさそうだ。むしろ悪化しているような印象すら受ける。にもかかわらず、古城の冷厳とした口調には、雪菜をからかっているような余裕すら感じられた。
「はい。わたしは、なんとか……って、先輩!?　血が……！」
「ああ……これか。風邪で鼻の粘膜が弱ってるのかもな」
古城の口元が、鮮血で紅く濡れていた。流れ出した鼻血を、掌で乱暴に拭った痕跡らしい。唇に残った血の跡を、古城が舌先でちらりと舐め取った。その唇の隙間から、鋭く伸びた牙がのぞく。
「今度こそ安静にしててください。いえ、その前に水分補給を――」
雪菜が新しいティッシュを取って、古城の口元を拭おうと

した。だがその前に古城の手が、雪菜の手首をつかんで強く引き寄せる。

「せ、先輩!?　熱が……！」

抱きとめられる形になった雪菜が、異変に気づいて声を洩らした。

古城の全身が異様な熱気を放っている。体温がでたらめに上昇しているのだ。普通の人間なら、とっくに意識をなくしていてもおかしくない危険な状態だ。

しかし、そんな重病人であるはずの古城が見せた行動は、雪菜の想定外のものだった。雪菜の背中に手を回し、硬直する彼女を抱き寄せたのだ。

「姫柊の身体は、ひんやりしてて気持ちいいな」

雪菜の首筋に頬を寄せ、耳元に古城が囁いてくる。吹きかけられた彼の吐息に、雪菜はぞくりと身体を震わせた。

「え……!?」

「それになんか、いい匂いもするし」

「ど、どさくさにまぎれてなにを言ってるんですか！　そんなことより、早くベッドに！」

雪菜が必死に説得して、どうにか古城をなだめようとする。そんな雪菜の精いっぱいの抵抗を古城は素っ気なく突き放し、

「嫌だ」

「はい!?」

「姫柊が一緒に添い寝してくれるなら、考えてもいい」

「こ、こんなときに、ふざけないでください！　い、いくら熱があるからって！」

雪菜の声に怒気が混じる。自分がこんなにも心配しているのに、それをまともに取り合おうとしない古城に、だんだん腹が立ってきたのだ。

しかし古城は雪菜を強く抱きしめたまま、優しい声でぼそりと告白する。

「心配なんだ。姫柊のことが」

「え？」

思いがけない古城の言葉に、雪菜の心臓が大きく跳ねた。熱で潤んだ古城の瞳が、至近距離から雪菜を見つめている。

「俺のせいで、いつも姫柊に無理をさせてるんじゃないかって。今日だってこんなふうにつき合わせてしまって」

「先輩……」

強張っていた雪菜の身体から力が抜けた。古城に押し倒されるような形で、ソファの上に、二人で抱き合ったまま倒れこむ。古城の息が首筋にかかるが、雪菜は抵抗しなかった。

「大丈夫です、先輩。これがわたしの任務ですから。それに、その……こうして先輩と一緒にいるのも、い、嫌ではありませんし……」

古城の背中に手を回しながら、雪菜がぎこちない口調で言う。

しかし古城の返事はなかった。雪菜の上に倒れこんだまま、古城は動きを止めている。雪菜はしばらく無言で彼の反応を待っていたが、やがて訝しげに眉を寄せて目を開けた。

「……って、先輩!?」

雪菜にぐったりともたれたまま、古城は意識をなくしていた。高熱に苦悶するような表情を浮かべながら、不規則な寝息を立てている。

情緒不安定になって奇行に走るのが、吸血鬼風邪の症状のひとつだ。普段とは違う古城の雰囲気も、風邪のウィルスが原因だったらしい。彼が最後に口にした言葉が、熱に浮かされての妄言なのか、それとも彼の本音だったのか――今となっては確かめるすべはない。

「もう！」

雪菜は傷ついたように頬を膨らませて、古城の下から抜け出した。

古城は、何事もなかったようにぐっすりと眠り続けている。そのことになんとなく腹立たしさを覚えて、雪菜は彼の頬を指先でつねった。直後――

「――っ!?」

マンションの外に異様な気配を感じて、雪菜が弾かれたように立ち上がる。

考えるよりも先に、身体が動いていた。壁際に立てかけてあったギターケースから、銀色の槍を抜き出して構える。金属製の柄が滑らかにスライドして、三枚の刃が展開した。

魔力を無効化し、ありとあらゆる結界を斬り裂く破魔の槍。〝雪霞狼（せっかろう）〟と名づけられた獅子王機関の秘奥兵器だ。

雪菜が構えた槍の切っ先は、窓の外へと向けられている。

古城たちの自宅があるのはマンションの七階。その窓の外の空中に、奇怪な影が浮かんでいた。花嫁のような銀色のドレスを着た、小柄な人影。整いすぎた人外の美貌を持つ少女である。

「あなたは……!?」

刺さるような冷たい視線を浴びながら、雪菜はベランダへと飛び出した。

雪菜が警戒している理由は、少女が殺気を放っていたからではない。その逆だ。少女からはなんの感情も感じない。ただ無表情に雪菜たちを見ているだけ。

まるで意思を持たない機械のように――

「人工眷獣への魔力供給源を捕捉……」

少女の唇が言葉を紡ぐ。決められた手順（プログラム）を実行するだけの無機質な声音だ。ガラス玉のような緑色の瞳が見つめていたのは、眠り続ける古城の姿だった。

彼女が伸ばした左手が、雪菜の胸元へと向けられる。

「目撃者の排除を開始。執行（エクスキュート）――」

その呟きが終わる前に、少女の左腕が上下に大きく割れた。腕の中から現れたのは、山刀（マチェット）に似た巨大な刃だ。

なにもない虚空を蹴って、少女が跳んだ。

刃と化した左腕を振り上げ、そのまま雪菜を襲撃しようとする。

だが、それよりも雪菜の動きのほうが速かった。ベランダの手すりを蹴って雪菜は空中へと舞い上がり、銀色の槍で少女の左腕を受け止める。そして――

「伏雷（ふしいかずち）っ！」

相手の攻撃の威力を利用した雪菜の踵蹴りが、垂直に少女

の顎先を襲った。
呪力を帯びた打撃をまともに喰らって、少女の上体が大きく仰け反る。
しかし彼女が地上へと落下することはなかった。少女の右手から伸びた透明な糸が、彼女の身体を空中につなぎ止めたのだ。
ふと気づけばマンションの周囲には、無数の糸が、蜘蛛の巣のように張り巡らされていた。彼女はその糸を利用して宙に浮き、古城のことを観察していたのだ。
「目撃者の脅威度判定を更新。高レベルの攻魔師と推定。確保プロセス失敗(フェイリュア)。離脱――」
屈強な獣人種すら昏倒させる雪菜の蹴りを受けながら、少女が苦痛を感じている気配はなかった。驚く雪菜の目の前で、少女の身体が上昇を始める。
人間の関節では不可能な動きで糸をたぐり、逃走しようとしているのだ。
「屋上に……!?」
少女の目的地に気づいて、雪菜は頭上を見上げた。そこに少女の仲間が待機している可能性は高い。迂闊に追撃するのは危険だ。
それでも、このまま彼女を放置するわけにはいかなかった。少女の狙いは、おそらく古城。そして雪菜は彼の監視役なのだから。
雪菜は槍を握り直して部屋に戻り、眠っている古城の横顔を見つめた。

「先輩、少しだけ待っててください――」
独り言のようにそう呟いて、屋上へと走り出す。

5

太陽光発電のパネルに覆われたマンション屋上には、真昼の熱気が籠もっている。
その強い陽射しの中に立っていたのは、時代遅れのロック歌手に似た、薄汚れた白衣の男だった。非常階段を駆け上がってきた雪菜を無遠慮に眺めて、彼は無造作に酒瓶を傾ける。
「アスタルテの眷獣に送りこまれている魔力を追跡してたら、意外な連中に当たったな。なあ、スワニルダ？　獅子王機関の剣巫がいるってことは、第四真祖が実在するって噂も本当か？」
「肯定」
男の呼びかけに答えたのは、銀色のドレスを着た影だ。透明な糸を操って、空中から古城を監視していた少女。彼女のほっそりとした左腕の先端は、巨大な刃物に変形したままである。
感情のない緑色の瞳が、敵対する雪菜を静かに映している。
「人形師様、当該剣巫の装備は、オリジナルの七式突撃降魔機槍(シュネーヴァルツァー)と推定されます。蓋然性は八十八パーセント――」
「なるほどね。ロタリンギアの殲教師殿が、どこで七式突撃降魔機槍の戦闘データなんてものを手に入れたのか不思議に思ってたんだが、これでひとつ謎が解けたなぁ。察するにキーストーンゲートでオイスタッハを止めたのも、おまえらってわけか」
雪菜の槍を一瞥しながら、男は不敵に微笑んだ。
彼らと正面から対峙した雪菜は、〝雪霞狼〟を油断なく構えて銀色のドレスの少女を睨む。純白の髪を持つ美貌の少女。彼女の正体に、雪菜はすでに気づいていた。
「人工生命体(ホムンクルス)……いえ、機械人形(オートマタ)ですか……！」
「どうせなら、人造人間(ヒューマノイド)と呼んで欲しいねぇ。スワニルダは、そこらの量産品の人形とは違う。俺が心血注いで造り上げた、最愛の女性(ヒト)だからさ」
男はそう言って、彼がスワニルダと呼んだ少女を抱き寄せる。
それに対するスワニルダの反応はごく自然で、とても人形とは思えなかった。むしろ普通の人間よりも、より完全な人間に近く感じられる。
「人工生命体(ホムンクルス)を素体にした機械人形(オートマタ)の製造は、聖域条約で禁止されているはずです」
雪菜が怒りを圧し殺したような声で指摘した。
まるで生きているかのように自然な機械人形(オートマタ)――スワニルダの完成度の秘密は、彼女が本当に生命を持っているからだ。
スワニルダは、人工生命体(ホムンクルス)の細胞を機械と融合させて生み出した機械化人工生命体(サイバネティクス)。すなわち文字どおりの〝生ける人形(モノ)〟なのだ。
だがそれは、スワニルダという一人の少女の肉体を切り刻み、単なる機械(モノ)へと近づける行為に等しい。今の彼女は、もはや生物とも機械とも判別できない、どっちつかずの不安定な存在だ。そんなものを創り出すことが、道義的に許されるはずもない。だからこそ人工生命体(ホムンクルス)の機械化は、魔族と人類の共存を目的とする聖域条約でも、絶対の禁忌とされているのだ。
しかし人形師と呼ばれた男は、そんな雪菜の怒りを平然と受け流す。
「聖域条約、か……ハッ、芸術の価値を理解できない凡俗どもに、〝永遠〟すら生み出す俺の才能を縛れるとでも？」
「……才能？」
「そうさ。彫刻家が石から作品を彫り出すように、俺は人工生命体(ホムンクルス)から芸術を創り出す。俺の死後も生き続ける〝永遠〟のアートをな」
「そんなことのために……彼女を機械人形(オートマタ)に……!?」
激昂する雪菜と人形師のやりとりを、スワニルダは表情も変えずに聞いていた。
彼女の姿を見て、雪菜は思い出す。生命を弄ぶような形で生み出された人工生命体(ホムンクルス)――その実例を、雪菜はもうひとつ知っていた。
「まさか、アスタルテさんを造ったのも……！」
「ああ。俺だ。ロタリンギアの殲教師殿の依頼でね」
人形師は、悪びれた様子もなく即答する。
「何週間も生きられないような欠陥品には、正直、興味はなかったんだが、あれが〝永遠〟を手に入れたのなら話はべつだ。ちょっと連れ戻そうと思ってね」

―アスタルテさんを……連れ戻す？」

雪菜が更に表情を硬くする。

アスタルテは、本来は吸血鬼にしか使役できないはずの眷獣を体内に埋めこんだ試験体だ。

眷獣の実体化に必要な魔力を供給できない彼女は、自らの寿命を削って、眷獣に与え続けていた。その結果、彼女の命は保ってあと数週間といわれていたのだ。

しかし古城との出会いによって、状況は変わった。

古城はアスタルテから眷獣の支配権を奪い、彼女の眷獣が第四真祖の魔力で動けるように、無理やり契約を書き換えた。いわば魔力の仕送りだ。

だから現在のアスタルテは、寿命を奪われることなく眷獣が使える。彼女は世界で唯一の、眷獣と共生可能な人工生命体（ホムンクルス）になったのだ。

「彼女を連れ戻して、どうするつもりですか？」

雪菜が人形師を睨んで訊く。人形師は美味そうに酒を舐めながら唇を吊り上げ、

「決まってるだろ。スワニルダの部品にするのさぁ。至高の芸術作品を生み出すためのなぁ」

「そんなことはさせません。獅子王機関の剣巫の権限で、あなたをここで逮捕します」

右手で槍を構えたまま、雪菜は左手で呪符（じゅふ）を取り出した。式神を応用した拘束用の呪符だ。

アスタルテの罪はすでに裁かれて、彼女はようやく平穏な日常を手に入れようとしている。

人形師が彼女の生みの親だとしても――いや、だからこそ、彼にアスタルテを渡すわけにはいかないのだ。

「ふん……」

しかし人形師は、身構える雪菜の全身を、舐め回すようにじっくりと観察して、

「おまえ、綺麗な肌をしているな」

「な、なにを……!?」

「ちょうどいい。そろそろ、スワニルダの表皮を張り替えたいと思ってたところだ。おまえも〝永遠〟の一部にしてやるよぉ」

「っ!?」

歪んだ欲望の視線を向けられて、雪菜の全身に悪寒が走る。

その直後、スワニルダがゆっくりと右腕を上げた。

彼女の指先から伸びた透明な糸が、陽光を浴びて輝いていた。糸が伸びた先に置かれていたのは、革製の大型スーツケースだ。ケースの蓋が勝手に開き、中から新たな人形が現れる。

新たな人形の数は二体。

球体関節を剥き出しにして、鋭い刃のような四肢を持つその姿に、スワニルダのような生々しさはなかった。彼女たちは完全な戦闘用の機械人形（オートマタ）なのだ。人形師は、雪菜を彼女たちと戦わせるつもりで、屋上へと誘き寄せたのだろう。

「ヘルシリア、スアーダ、戦闘出力で起動。統合演算開始。執行せよ（エクスキュート）――」

スワニルダが人形たちに攻撃を命じた。

昆虫のような複眼を輝かせ、二体が左右から雪菜を襲ってくる。

一瞬のズレもない完全な同時攻撃だった。

刃と化した四肢が大気を裂き、人体ではあり得ない角度から雪菜を襲ってくる。

その凄まじい速度に雪菜は圧倒された。感情を持たない人形たちの攻撃に殺意はなく、そのことが逆に雪菜を幻惑させる。回避のタイミングがつかめない。

「速い……っ！」

絶え間なく続く人形たちの猛攻に、雪菜は次第に追い詰められていく。

戦闘用にチューンされた人形たちの斬撃は、速く、そして重かった。それでも一体ずつが相手なら、雪菜が手こずるほどの相手ではない。攻撃を終えた一瞬の隙をついて、反撃するのは難しくないはずだった。だが、それを許さないのが、対になる人形の存在だ。

人形たちは、互いの隙を補い合って雪菜の反撃を防ぎ、雪菜の逃げ道を塞いでいく。

自らの意思を持たない二体の人形は、司令塔であるスワニルダに操られることで、一個の精密機械のような、完全な連携攻撃を可能にしているのだ。

「へえ。さすがは獅子王機関の剣巫。よく防ぐな……霊視で一瞬先の未来を視てるのか」

人形師が本気で感心したように呟いた。彼にしてみれば、雪菜が人形たちの攻撃を防ぎ続けていることのほうが、むしろ驚きなのだろう。

「だが、読み合いで機械人形（オートマタ）の演算能力に勝てるかな？　ああ、そうだ……その娘の肌には、なるべく傷をつけないようにな、スワニルダ」

「命令受諾（アクセプト）――」

純白の髪の人形が、たん、と軽く足元を蹴った。左腕の巨大な刃物を構えたまま、雪菜を目がけて加速する。

「しまっ……」

迫り来るスワニルダに気づいて、雪菜は表情を凍らせた。人形二体の猛攻を受けていた雪菜に、三体目の敵を防ぐ余裕はない――

金属と骨がぶつかるような、鈍い激突音が響く。

それまで無表情だったスワニルダの瞳に、初めて戸惑いの光が浮かんだ。

人形師が、ぐっ、と唇を歪める。雪菜の心臓を貫く直前、横殴りの衝撃がスワニルダを襲って、刃の軌道を逸らしたのだ。

突然飛び出してきて雪菜を救ったのは、気怠そうな表情を浮かべた部屋着姿の少年だった。その唇の隙間からは鋭い牙がのぞき、彼の全身は眩い黄金の稲妻に包まれている。

「先輩……!?」

雪菜が呆然と呟いた。風邪で寝ていたはずの古城が、膨大な魔力を撒き散らしながら現れたことに困惑しているのだ。

一方の古城は、寝癖のついた前髪を面倒くさそうに掻き上げて、

……たく、他人ん家の屋上で、なに騒いでんだよ、おまえら
どこか冷え冷えとした口調でそう言った
紅く燃える瞳で睨まれたスワニルダが、二体の人形を引き連れて距離を取る。第四真祖の襲撃から、主人である人形師を護ろうとしたのだろう
「先輩、どうしてここに……!?」
銀色の槍を旋回させて、体勢を立て直しながら雪菜が訊いた
そんな雪菜を、古城は不機嫌そうに睨めつける。
「姫柊が心配だったからに決まってるだろ！　一人で勝手に出て行きやがって！」
「で、ですけど、体調は――」
「体調？　全然問題ねェな……生まれ変わったみたいにスッキリした気分だぜ。ご機嫌だ」
そう言って古城は獰猛に笑った。その発言を裏付けるかのように、彼の全身を覆う稲妻が、黄金の輝きを増していく。
「……え？」
そんな古城の雄々しい姿を、雪菜は不安げな表情で見つめた。
たしかに今の古城には、意識を失う直前までの、衰弱した印象は感じられない。顔色もそう悪くない。
だからといって普段の古城とも印象が違う。
雪菜が知っている暁古城は、第四真祖の力を持て余し、疎んでいるような少年だったはずだ。しかし今の古城はそうではない。己の力を完全に掌握し、愉しんでいるような気配すらある
「手を出さないでくれないか、第四真祖。俺たちは、アスタルテへの魔力供給源が何者なのか確認できれば、それでよかったんだ。おまえにはもう用はない。俺たちの邪魔をする気なら、おまえの代わりに、そこにいる剣巫の娘を引き裂いて肉片に変えるぞ」
空になった酒瓶を投げ捨てて、人形師が言った。世界最強と呼ばれる吸血鬼と対峙しながらも、萎縮した様子は微塵もない。不老不死の真祖を滅ぼすことはできないまでも、無力化する手段ならいくらでも持っている、と古城を蔑むような眼差しで無言のうちに語っている。
しかし古城は、その人形師を睨めつけて牙を剥いた。
「それはこっちのセリフだぜ、人形オタク」
「……オタク……だと？」
人形師が、嫌悪感も露わに表情を歪めた。芸術家を自称する彼にとって、自分を素人同然のコレクターと同列に扱われるのは、許されない侮辱なのだろう。
しかし殺気を孕む人形師の瞳を見返して、古城はなおも挑発的に首を振る。
「他人の趣味をどうこう言う気はねェけどな、等身大のフィギュアはさすがに引くぜ！　ドン引きだ！　つか、そいつらの服装はあんたの趣味かよ？　エロすぎんだろ！」
「俺の、芸術を！　そこらの俗物どものオモチャと一緒にするなっ！」
人形師が怒りにまかせて荒々しく吼えた。

アスタルテへの魔力供給源を突き止めるという、彼の目的はすでに達成されている。もはや人形師には危険を冒してまで雪菜や古城と戦う理由はない。だがそれを冷静に判断するだけの分別は彼の頭から消えている。おそらくそれが古城の目的だったのだろう。人形師の逃走を防ぐため、わざと怒りの矛先を自分に向けさせたのだ。

そんな古城の冷静な判断力に、雪菜はますます不信感を募らせる。

こんな頭脳的な戦闘スタイルは、雪菜が知っている古城のやり方ではない。

いや、ある意味では、むしろこれが本来の彼の性格なのかもしれない。

バスケ部員だった中学時代の古城なら、試合中に相手を挑発するような駆け引きにも慣れていたはずだ。つまり今の古城は、そのころの身勝手で好戦的な性格に戻っている。普段隠している本音が、だだ洩れになっている状態なのだ。

「やつを殺せ、スワニルダ！　何度でもだ！」

「命令受諾（アクセプト）――」

人形師の命令に従って、スワニルダが戦闘を再開した。三体の人形がそれぞれ散開して、古城たちを包囲する。歯車や発条（バネ）の音を軋ませて、彼女たちは変形を始めていた。胸部が大きく左右に割れて、無骨な回転式機関砲が現れる。

機関砲の弾丸として装填されているのは、長さ十センチほどの金属針だった。対吸血鬼用の金属杭投射銃（ニードルガン）――何十年も前に製造が禁止された、非人道的殺傷兵器だ。

「先輩、気をつけてください。彼女たちは――」

「ああ。アスタルテに似てるけど、生命力は感じねェな。ただの人形か」

ギリ、と奥歯を鳴らして古城が息を吐く。

「だったら、手加減の必要はねえな！　悪く思うなよ――！」

そう言い終える前に古城が動いた。吸血鬼ならではの凄まじい跳躍力と敏捷性だった。機関砲を構えた人形の懐まで、いっきに間合いを詰めて潜りこむ。

古城が無造作に放った拳が、機関砲の砲身をへし折った。その衝撃に耐えきれずに吹き飛んで、人形（ヘルシリア）が屋上のフェンスへとたたきつけられた。

もう一体の人形（スアーダ）は、古城の背中に向けて金属杭を射出する。仲間（ヘルシリア）を巻き添えにしてでも、古城を殺そうとしたのだ。

しかし古城は、稲妻をまとう右手を無造作に振って、毎分数百発の速度で飛来する金属杭のすべてを叩き落とした。その雷撃は人形（スアーダ）をも巻きこんで、彼女の全身を焼き焦がす。

「な……!?」

一方的に人形たちを蹂躙する古城の姿に、雪菜はただ絶句する。

雪菜を追い詰めた戦闘人形（オートマタ）たちの反撃を、古城は歯牙にもかけていない。スワニルダの演算能力をもってしても、古城の動きをとらえきれないのだ。今の古城はあまりにも強すぎる。

「……ヘルシリア、損傷率四十七パーセント。スアーダ、損傷率不明。再起動を試行。失敗（フェイリュア）」

スワニルダは戦闘を続けていたが、すでに勝敗は決していた。

彼女の右手につながれていた糸が、次々に音を立てて切れていく。

古城が放つ稲妻が銃撃を撃ち落とし、人形たちが振り下ろす刃を吸血鬼の筋力が粉砕する。倒れて動けなくなった人形を、古城は酷薄に踏みにじる。

「第四真祖の力を、完全に制御している……これが先輩の……本気の姿!?」

その間、雪菜は一人で呆然と立ち尽くしていた。

古城に対して初めて恐怖を感じる。今の古城は、完全に吸血鬼としての能力を使いこなしていた。それだけでなく、魔族としての凶悪な本性まで剥き出しにしているように感じられる。

今の古城はまさしく世界最強の吸血鬼だ。天災にすら匹敵するといわれる怪物だ。だからこそ彼を監視するために雪菜が派遣されてきたのだ。彼を抹殺するための、破魔の槍を携えて。

「ちっ……」

「機関部に深刻な損傷が発生。予備回路起動。自壊モード」

苛立たしげに舌打ちする人形師に、スワニルダが淡々と報告する。

彼らの意図を察した雪菜が青ざめた。

「先輩！」

「自爆する気か！」

古城も状況を把握する。壊れかけの人形たちが、最後の力を振り絞って跳躍。頭上から雪菜たちを襲ってくる。そのまま自爆しようとしているのだ。

しかし古城の反応は、彼女たちよりも速かった。

古城の右腕から撒き散らされた魔力が密度を増して、巨大な獣の姿に変わる。自らの意思を持つほどに濃縮された魔力の塊。吸血鬼が自らの血の中に従える、異界からの召喚獣。眷獣だ。

「疾く在れ（きやがれ）、〝獅子の黄金（レグルス・アウルム）〟――」

古城の魔力が実体化させたのは、巨大な雷光の獅子だった。全長十数メートルを超える巨体が、まさしく紫電の速度で疾駆し、二体の人形を薙ぎ払う。雷光の獅子の一撃は人形たちを瞬時に焼き尽くし、残骸すら残さずに消滅させた。

その余波は巨大な爆風となって周囲に吹き荒れ、絃神島の人工の大地を地震のように激しく揺らす。第四真祖の眷獣の力は、たかが機械人形（オートマタ）を相手にするには、あまりにも大きすぎたのだ。

叩きつけてくる灼熱の衝撃波を、雪菜は銀色の槍を楯にしてどうにか防ぐ。魔力を無効化する〝雪霞狼〟は、真祖の眷獣にも対抗し得る唯一の武器だ。

しかし古城の攻撃に巻きこまれたのは雪菜だけではない。

「スワニルダ！」

人形師が絶叫する。彼を庇うように立っていた純白の髪の機械人形（オートマタ）が、激しい火花を散らしてよろめいていた。彼女の体内に埋めこまれた機械が、落雷の影響をもろに浴びたのだ。

クソが、と吐き捨てるようにうめいて、人形師がスワニルダを抱き留めた。
その直後、彼の周囲に炎の紋様が浮かび上がる。
足元に撒いた強い酒（アルコール）を触媒にして、魔法陣を描いたのだ。
スワニルダの身体を抱えたまま、人形師の姿が消滅した。
練達者級の魔法使いでなければ制御できないといわれる、空間転移の術式である。退廃的な外見に反して、人形師の正体は、凄まじい技量を持つ高位魔術師だったらしい。雪菜の霊視をもってしても、彼らを追跡することは不可能だ。
「逃がしたか……ま、あれだけ痛めつけとけば、少しは懲りただろ」
人形師たちがいなくなった屋上を見回して、古城が、どこか清々しげな口調で言う。周囲にこれだけの魔力を撒き散らしておきながら、まるで反省した様子がない。
雪菜はそんな無責任な態度の古城を、泣き出しそうな顔で睨みつけ、
「やりすぎです、先輩！　制御できたからよかったようなものの、こんな街中で第四真祖の眷獣を使うなんて！　一歩間違えばこの都市（まち）が消滅してたかもしれないんですよ！」
他人事のように肩をすくめる古城に、雪菜は本気で憤慨する。
雪菜は古城の監視役だ。もしも古城が人類にとって危険な存在となったときには、彼を抹殺しなければならない。もちろん雪菜もそんなことを望んでいるわけではないが、古城がこのまま第四真祖の力に溺れ、それを己の欲望のままに弄ぼうとするのなら、彼を止めないわけにはいかない。世界最強の吸血鬼の力は、あまりにも危険過ぎるからだ。
しかし古城は、詰め寄ってくる雪菜を軽くあしらうように攻撃的に微笑んで、
「上手くいったんだから、問題ないだろ。姫柊が無事だったのなら、それでいいよ」
「え？　あ……た、助けてくださって、ありがとうございました……じゃなくて！」
古城の言葉に、雪菜は思わず感謝の言葉を口にする。雪菜の怒りが途切れた一瞬の隙を見計らって、古城は彼女の手を握って乱暴に引き寄せた。
「でも、そうだな。どうせなら、感謝の気持ちは態度で示してくれないか」
「た、態度って……!?」
「そうだな。たとえば、こんなふうに――」
古城に力強く抱きしめられて、雪菜は一瞬、呼吸を止める。咄嗟に抵抗しようとしたが、吸血鬼である古城の力には逆らえない。
「だ、だめです、先輩！　わたしは先輩の監視役ですし、こ、こんなところでは人に見られてしまいますから――」
弱々しい声で雪菜が叫んだ。いつになく積極的な古城に惹かれるものを感じながらも、やはり彼の本性は危険な吸血鬼だったのだろうか、と苦悩する。
そんな彼女の葛藤も知らずに、古城は雪菜を押し倒そうと更に体重を預けてきた。

そして――
そのまま重力に引かれて、勢いよく屋上に倒れこむ。
頭蓋骨がコンクリートに激突する、ゴッという音が鈍く響いた。
それきり古城は動かなくなる。
「あ、あの……先輩？」
うつ伏せに倒れたままの古城を見つめて、雪菜は呆然と呟いた。
なにが起きたのかわからないまま、雪菜は失神した古城を抱き起こし、
「熱っ……！」
そのときになってようやく雪菜は、古城が発熱していたことに気づく。
あれだけ激しく動き回ったのだから当然だが、明らかに異常なほど体温が上がっていた。
原因は、風邪だ。
情緒不安定になって奇行に走るのは、吸血鬼風邪の症状のひとつ。
妙に好戦的だった古城の態度も、第四真祖の能力を完全に使いこなしていたことも、高熱に浮かされての奇行に過ぎなかったということらしい。
おそらく次に目を覚ましたとき、古城は自分が真祖の力を制御していたことや、人形師たちと戦ったことも、すべて忘れてしまっているだろう。
彼の異変に振り回されて散々苦悩させられた雪菜は、なんですかもう、と深い溜息をつく。
だが古城は、そんな意識も定かではない状態で、雪菜のことを助けに来てくれたのだ。
「あなたは本っ当に仕方のない吸血鬼（ヒト）ですね……ばか！」
眠りに落ちた古城を膝枕して、雪菜は彼の髪を優しく撫でた。
吸いこまれそうに青い夏空の下で、爽やかな午後の海風が、二人の頬を撫でていく――

6

翌日――
目覚めた古城の視界に飛びこんできたのは、至近距離から自分を見下ろす凪沙の顔だった。見慣れた自宅マンションの一室。古城のベッドの上である。
「あ、起きた。気分はどう、古城君？」
気遣うような妹の声に戸惑いながら、古城はゆっくりと上体を起こした。
窓から見える空は、夕陽を浴びて赤く染まっている。夕暮れが近いのだ。それを見上げて古城は更に困惑した。眠る前からの記憶がまったくない。
「凪沙？　あれ……俺は……？」
「風邪引いてぶっ倒れたの。心配したんだよ。丸一日ずっと眠りっぱなしだったんだから。雪菜ちゃんにもお礼言っておいてね。昨日は凪沙の代わりに学校休んで看病してくれたん

だよ」

凪沙が呆れたように溜息をついた。

ベッドの隣にちょこんと座っていた制服姿の雪菜に気づいて、古城は半信半疑で眉を寄せ、

「そう……なのか？」

「やっぱり覚えてないんですか？　昨日のこと」

雪菜が小首を傾げながら訊いてきた。ああ、と古城は額を押さえて首を振る。

体調は、もう悪くない。熱もないし、喉の痛みも感じない。少し身体が重い気がするが、それは起き抜けのせいだろう。しかし昨日あったはずの出来事は、どうやっても思い出せなかった。

「いや、全然……朝、凪沙に叩き起こされて、なんとなく怠かったことくらいしか……」

「そうですか。では、昨日、わたしにしたことも忘れてしまったんですか？」

雪菜が責めるような目つきになって、古城を上目遣いに睨んでくる。

え、と驚いたように目を見張る凪沙。

「ちょ……ちょっと待った。俺が姫柊になにかしたのか？」

古城は言葉にならない不安を覚えて、掠れた声で訊き返した。

そんな古城をじっと見つめて、なぜか雪菜は安心したようにふっと息を吐く。

「ふふっ……教えてあげません」

「なんだそれ？　気になるだろ！」

落ち着かない気分で心臓を押さえて、古城が喚いた。凪沙が無言で怒りのオーラを放ち始めていた。病気で学校を休んでいたはずの兄が、自宅で自分の同級生に手を出していた、と知った妹としては当然の反応だ。しかしもちろん古城には、身に覚えなどまったくない。

完全に追い詰められた古城が、救いを求めるような眼差しを雪菜に向ける。

その頼りない第四真祖の表情を満足そうに見返して、雪菜は優しく微笑んだ。

「早く元気になってくださいね、先輩」

To Be Continued...

ストライク・ザ・ブラッド
STRIKE THE BLOOD

アニメ『ストライク・ザ・ブラッド』第1巻初回特典付録

ストライク・ザ・ブラッド・アペンド1

続・聖者の右腕／人形師の遺産

—第一章—

著／三雲岳斗

イラスト／マニャ子

装丁・デザイン／根津典彦（G-SQUARE）

協力／株式会社 KADOKAWA アスキー・メディアワークス
電撃文庫編集部

© 三雲岳斗 / アスキー・メディアワークス /PROJECT STB

ストライク・ザ・ブラッド

STRIKE THE BLOOD

APPEND1

続・聖者の右腕／人形師の遺産

－第一章－

1000451395-B